

奈良県十津川村の盆踊りと教育的意義

森下修次*1, 高橋範行*2, 浅井泰子*3, 小山麻里*3, 中西秀樹*3, 平田哲朗*3, 細川麻衣子*3

The Bon festival dance of Nara Totsukawa and that educational meaning

Shuji MORISHITA, Noriyuki TAKAHASHI, Yasuko ASAI, Mari KOYAMA,
Hideki NAKANISHI, Tetsuro HIRATA and Maiko HOSOKAWA

1. はじめに

十津川の地勢

奈良県吉野郡十津川村は紀伊半島中央部に位置する山村である。周囲は全て山に囲まれており、谷に流れる熊野川水系を中心として村落が存在している。面積は村としては日本で一番広く地形も険しいことから最北部から最南部までは国道を車で2時間程度かかるほどである。京都から十津川村中心部までは自家用車で5時間ほどかかる。京都～新瀉が高速道路利用だと6時間程度で走破できることを考えると、たいへんな僻地にあることがわかる。

村の東側は紀伊山地の中心部「近畿の屋根」と称される大峰山脈が連なっており、その尾根道は古代より大峯奥駈道と呼ばれ修験道の行場として栄えた。南、西は和歌山県に接しており、西側は真言宗本山高野山などが隣接してある。南には奥駈道ゆかりで日本有数の神社の一つである熊野本宮大社がある。南東側は瀨八丁で知られる北山川を挟んで三重県と接している。大峯奥駈道と熊野古道と呼ばれるかつての参道や社寺は「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産にも登録されている。

この地の自然の険しさを物語るエピソードそして北海道新十津川町の誕生¹⁾がある。明治22年に十津川郷をおそったのは、大きな谷を埋め尽くすぐらい濁流があふれるなどと言い伝えられた壊滅的大水害であった。これは地元の人の言い伝えによると廃仏毀釈による排除された仏教寺院の祟り

が原因だと言われている。大水害にあった人たちの一部は新天地を求めて北海道に渡り、現在の北海道樺戸郡新十津川町を形成した。

十津川の文化

十津川の廃仏毀釈は徹底して行われたようである、例えば今日でも奥駈道は真言宗、天台宗の共同で修行が行われているが、前鬼以南の奥駈道は20年前まで荒れており、地元の有志を中心とした活動によって近年整備されたという経緯がある。これは村内の名刹、玉置神社は明治初期まで高牟婁院(修験道寺院)が管理していたが、廃仏毀釈時に村内の他寺院と同じく退けられたことと関連があると思われる。何故廃仏毀釈が徹底して行われたかは、時の明治政府の方針に尊皇の気風の高かった十津川郷が忠実に従ったためだと思われる。672年壬申の乱の際、天武天皇の吉野御軍に参加し戦功によって租税を免除され、その後明治の地租改正まで続いたが²⁾、経済発展が見込めない十津川郷では山深い山村という地の利と何かあれば国事に尽くすことで自治を維持し、独自の文化を育てたのではないかと思われる。

今回、取材した十津川村の盆踊り「大踊り」は無形文化財に指定され、研究者にも注目されている踊りであるが、その風情は優雅であり踊りも難易度が高い。京都から遠く離れた地ではあるが、自治を守るために都の情報に常に収集されていたと考えられる。そのことと「大踊り」の優雅さは無関係ではないだろう。

なお、紀伊半島一帯は京都・大阪文化圏で言葉も当然それらの影響を受けたイントネーションで発声されるが、十津川地域のイントネーションは「京都弁」より「標準語」に近い。ただ、地元の人たちは「標準語」に近いと言われるのを嫌い、あくまで「十津川弁」と主張する。これも十津川の独自性の

平成18年2月28日 受理

*1 新潟大学教育人間科学部(人文社会・教育系)

*2 京都市立芸術大学大学院音楽研究科

*3 新潟大学教育人間科学部

一つであり、十津川の人々が郷土の文化や歴史に非常に誇りを持っていることは確かである。

十津川は地区毎に独自の文化や風習を発展させており、非常に興味深い。平成元年3月20日に国指定重要無形文化財に指定された「十津川の大踊り」^④は十津川村南部、同村の中心部に近い三つの地区で行われ、それぞれ「小原の大踊り」、「武蔵の大踊り」、「西川の大踊り」と呼ばれている。扇子や太鼓の扱いなど特徴的な部分で共通点も多いが、細部では異なる点も多い。これらは地区それぞれの盆踊りの一演目として踊られる。以下に2005年8月13日～14日にかけて取材から祭りの様子を記す。

2. 小原地区の盆踊り

概要

毎年8月13日に地元の十津川村立三村小学校の校庭で行われ、2005年も8月13日に行われた。会場は役場から徒歩10分ほどの場所にあり、十津川(熊野川)を見下ろす山の中腹にある。かつては泉蔵院の堂内で踊られており、廃仏毀釈後も「踊り堂」と呼ばれ盆踊りに使用されていた^⑤。8月1日からナラシ(練習)を始め、7日盆は休んで8日からは毎晩踊り、12日はまた休んで13日の本番を迎える。そして16日には送り踊りをする。

校庭グラウンドの真ん中に檜が組まれ中心に青竹が立てられ、上方にはっぼう(八方提灯)を吊り下げる(図1)。人々はこの周囲を輪踊りする。演目^⑥は表1の通りである。



図1 小原盆踊り会場(木曾節)

木曾節は扇子を使わないが(図1)、ほかの踊りは両手一つずつ計2枚の扇子を手を持って踊る(図2)。

表1 小原地区盆踊りの演目

1. 木曾節	15. おかげ踊り
2. 申本節	16. 笠踊り
3. ヨイショコラコラ	17. 草津節
4. つばくら口説	18. 関の五本松
5. お杉口説き	19. 五十三次
6. 天誅踊り	20. おいそ口説
7. 鈴木主人	21. やっちゃん踊り
8. 中山口説	22. おくま口説
9. スットン節	23. どんどんどこいしよ
10. 鴨緑江節	24. ヨイショヨイショ
11. 笠くずし	25. 相撲取り
12. たばこ口説	26. エッコラショ節
13. 有田節	27. 大踊り
14. 高い山音頭	

..... 口説き踊り / ____ 大踊り / 左以外: 馬鹿踊り



図2 小原盆踊りと扇子

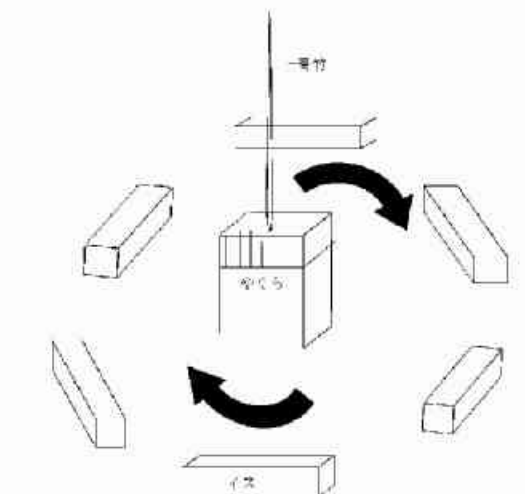


図3 会場の配置図

会場の大まかな配置は図3に示す。人々は檜の周りに一重、または二重の円を作って踊る。観客や疲れたものはイスに座ってそれらを眺める。やぐらは紅白の幕がかけられ、中心には青竹が立て

られていた。その青竹にも紅白の布が巻かれていて、そこから四方に提灯が吊されていた。やぐらの上には二人の男性が座り、一方の手には太鼓、もう一方の手にはバチを持って歌っていた。大踊りでは、途中片方の男性と踊っていた女性とが交代した。

当日の開始直前の様子

やぐら、提灯などは前日から用意してある。この日は、天気はあまりよくなく午後6時くらいまでは雨が降っていた。決行されるか危ぶまれたが午後7時頃にはなんとか天気もち直し、行われることになった。人々がばらばらと集まりはじめ、地元の十津川警察が金魚すくいを始め、その周りには子供たちが集まり少しずつ会場は活気に満ちていった。また、そのころには日も完全に落ち、提灯の光がぼおっと明るく光り、周りの山々とあいまって何とも幻想的な雰囲気であった。

服装について

午後8時頃に踊りが始められた。はじめの木曾節において踊り手はまだ10人弱ほどで、金魚すくいをやっている人や周りで見ている人が多かった。女性が中心だったが、時間がたつにつれ開始直後にはいなかった男性の姿も見受けられるようになった。服装は、女性のほとんどが各々持参の浴衣を着ていて、男性も女性ほどではないが浴衣を身につけていた。女性は年齢層に関係なく浴衣を着ている人が見られたが、男性は年齢の高い人たちに浴衣姿がより多く見られたように思われた。女性も男性も年齢を重ねた人ほど浴衣を着こなしている印象があり、この土地と祭りとの長い年月を経て深くつながっていることを感じ取ることができた。ここ小原を含む十津川村での盆踊り、そしてその後新潟への帰路の途中、京都で運良く遭遇することのできた「大文字の送り火」で男性の浴衣率の多さに驚かされた。数年前から、関東を中心に祭り時の男性の格好として「じんべえ」が流行っている。そのために関東や新潟では男性の浴衣姿を全くと言っていいほど見かけなくなった。特に若い男性についてはその影響力は顕著であって、そのために十津川村や京都で目にした男性の浴衣姿はとても新鮮に映った。同じ祭りの姿でも関東と関西の風景は随分違って見えることを改めて感じさせることとなった。

踊りについて

踊りは、前述の図3のように、やぐらの周りを囲むように円形になって行われ、踊りのステップを踏みながらぐるぐると回っていた。祭りが進むにつれ徐々に踊りに加わる人々も増え、20分もたたないうちに3、40人ほどになった。参加者全員完璧に踊れるというわけではなく、他人の踊りを手本に見よう見まねで踊っている人もいた。それは盆で帰省した人や他地域に住んでいる地元民の親戚縁者なども自由に参加しているからだと思われる。踊り疲れたらイスに座って休み、また参加するという感じだった。誰でも参加できる自由な雰囲気があった。

今回はNHKの取材があったので踊りの順番が変更されて9時前に休憩を挟んだ後大踊りが取材用に行われた。お踊りになると人々の動きがそれまでの踊りとは違った。

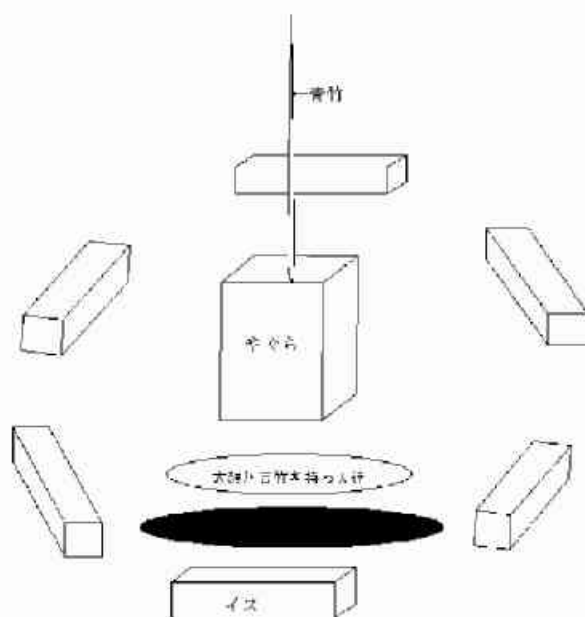


図4 大踊りの会場配置図

それまでの踊りは前述したように人々は櫓の周りをぐるぐると一定方向に踊り進んでいたが、祭りのクライマックスとも言える「大踊り」になるとそれまでの様子が一変した。図4のように踊り手と太鼓、3mほどの青竹を持つ人たちに分かれ、全員がイスの方向、つまり円の外側に体を向けていた。太鼓の音に合わせて歌い、青竹をゆすり踊り手たちはその場の雰囲気の独特な高揚に身を任せ大踊りを踊り続ける。その場にいる全ての人々が同じ方向を向いて音楽に合わせて踊ったり太鼓を叩いたりするのは見たこともない光景で奇妙にさえ思えた。



図5 大踊り開始時



図6 大踊り中盤

その踊りを 20 分ほど続けたあと、大踊りはさらに盛り上がりを増し、「攻めの歌」に入っていく。今度は、他の盆踊りと同様（図 3）またやぐらの周りを回り出す。しかし、大踊り前の踊りとはまた違う。歌い手は声をますます大きく、高く張り上げ、それに合わせて太鼓の音も激しくなり、青竹を持った男達はやぐらの周りを全力で駆け回る（図 7）。踊り手達もよりいっそう踊りに精神を集中させる。それをしばらくの間繰り返して、大踊りはクライマックスを迎える。



図7 大踊り終盤

クライマックスを終えると幼い子どもやそれを連れた大人たちが帰りですが、その後もしばらくは踊り続ける人がいた。会場ではお酒やつまみも

あって、大人達はそれを飲んで踊りに加わったりしていた。それがまた、踊りの盛り上がりに一役買っているのだろう。最近の地域の祭りでは子どもの行事と化しているところも見受けられるが、ここの盆踊りは、子ども達にも増して大人達が祭りや盆踊りを楽しんでいる。

名物おじいさん

この小原の盆踊りで印象的だったのは仮装をして踊っている名物おじいさんがいたことである。おじいさんは顔を白塗りし、頬紅を塗り、女性の浴衣や花飾りがたくさん付いたドレス、ほかにチャイナドレスなど様々な衣装に仮装して会場のみな目の楽しませていた（図 8）。しかし、大踊りの仮装はそれらの女装とは違い、昔からの農作業の格好をして出てきた。大踊りの仮装に関しては昔から受け継がれていて、盆の時期に子孫の里を訪れる祖垂を思い起こさせるものであるのだという。



図8 名物おじいさん4態（左右は小山と細川）

大踊りは他のものとは異なるが、それ以外の踊りは何度かの休憩を挟みつつどんどん行われた。先にも書いたがはじめの木曾節以外は全て扇子を両手もって行われていた。扇子の使い方は様々で要をしっかりと持つこともあれば端を緩く持ってひらひらさせることもあった。

大踊りが行われたのは午後 10 時半過ぎで、大踊りが終わったのは午後 11 時頃で、帰る人も多くどんどん人は減っていったが、まだ踊りを続ける人もいた。

3. 武蔵地区の盆踊り

概要

毎年 8 月 14 日に地区の中心に位置する十津川村教育資料館（旧十津川村立武蔵小学校）校庭で行われ、2005 年も 8 月 14 日に行われた。会場は役場近く温泉地温泉から細くて急勾配の山道を車で 10 分ほど登った場所にあり、静かな山里といった風情である。村内にある玉置神社が神仏混淆

だったころ、念仏踊りが伝えられたという。廃仏毀釈後も念仏踊りは踊り継がれた。武蔵野の大踊りは念仏踊りとして始められたとされている。重要無形文化財に指定される以前、昭和49年12月4日に文化庁より無形文化財として選ばれた⁴⁾。かつて光明寺があり、踊りの中心を成しており、盆踊りもその堂内で踊られた。

当日の様子

この日は、昼に雨が降っていたため、準備も天気を見ながら進められていた。準備の時間が曖昧なのはその影響もあるのかもしれない。地元の人たちは陽気な方が多く、「ぼちぼち、始めますかあ。」という感じで午後7時頃始まった。

午後8時頃に会場準備が終わると、子どもたちが太鼓を持って村の人を呼びに行く。太鼓をたたきながら地区内を歩き回り、人を呼ぶので、呼び太鼓と言われている。

呼び太鼓が終わると、ぼつぼつと人が集まってくる。午後8時半頃、適度に集まったところで、歌手の方々（男性2名、女性3名）がやぐらに登り、歌い始める。最初踊っている人は少ないのだが、だんだんと増え、最終的にはやぐらの周りを三重の円になるほどだった。曲目が20曲以上あるので、疲れたら椅子に座って休憩し、また輪に戻っていくというのを繰り返していた。演目を表2に示す。



図9 武蔵盆踊り開始直後



図10 旧小学校舎に向かって撮影

表2 武蔵地区盆踊り演目

1. ダンチョネ節	12. 筏節
2. 串本節	13. お杉くどき
3. サノサイ節	14. スットン節
4. 笠くずし	15. ドンドンドッコイショ
5. さのさ節	16. 磯節
6. おかげ節	17. 木曾節
7. 笠踊り	18. 花づくし
8. ドーマカチャン	19. ヤッチョン踊り
9. ひよひよ節	20. エッコラショ
10. お松くどき	21. 深川くずし (石童丸)
11. 川堀 (ソコジヤイ ソコジヤイ)	22. 大踊り

会場は図11の通りである。旧小学校校舎と向き合ひ形で設置される。やぐらには紅白ではなく、赤と水色の縞の幕が張られていた。やぐらの周りの椅子はかつて踊られたお堂を形取っている。

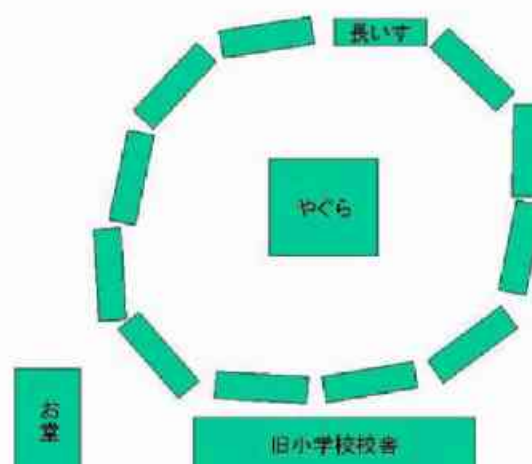


図11 盆踊り会場の位置関係

踊りは、両手に扇子を持って踊るのがほとんどだった。決まった扇子というものは特になく、様々だった。使い方が面白く、扇子の端を持って蝶の羽のようにひらひらと動かすことが多かった。



図12 武蔵大踊り(1)



図13 武蔵大踊り(2)



図14 武蔵大踊り(3)



図15 武蔵大踊り(4)

また、要と要をぶつけて鳴り物の代わりにしているものもあった。

曲については、ほとんどが 80bpm (beats per minute) ぐらいか少し遅めか早めのテンポであった。演目は順番があらかじめ決まっているというより、歌い手が周りの様子を見て選曲を行っているようだった。合いの手は、個人の声の高さでばらばらだった。盛り上がってくると、合いの手の部分だけでなく歌も一緒に歌っていた。そして、歌詞を作って付け加えているところもあった。

曲の最初は横に並んでいるが、中間くらいでテンポが上がってくると、女性はやぐらの周りに円を作り、その内側に 2人1組で太鼓を持った男性

たちが太鼓をたたきながら踊っている(図12)。さらに曲の最後に向けて激しくなってくると灯笼を持った男性たちが走り回り(図13)、とても力強く、にぎやかな踊りになる。わざとぶつかり合ったりとても激しかったが(図14, 15)、よく知っている人同士で信頼できるからこそ可能なことだと感じられた。

大踊りは午後 11 時頃始まった。今までは輪になって踊っていたが、この大踊りでは受付とやぐらの間に横に 4 列くらいに並んでいた。男性は水色、女性は赤の袴をかけ、気合の違いが明らかだった。

大踊りの後は、その会場で宴会が始まった。

残った人は約 60 人で踊っているのは約 50 人、そのうち約 30 人は毎年ゼミで来ているという学生(大阪市立大学)であった。

4. 西川地区の盆踊り

概要

西川地区の盆踊りは十津川村中心部から車で 30 分、十津川村で最もにぎやかな十津川温泉から車で 15 分ぐらいところにある十津川村立西川中学校の校庭で行われる。もともと西川筋では大字毎に踊られたそうであるが、現在では重里、永井、玉垣内地区の人たちが集まってくる。重里地区を拠点に保存会が結成され、同地区にある中学校に集まって行われている。かつては河原で、さらにその前はお堂で踊られたそうである^⑩。毎年 8 月 15 日に行われてるが 2005 年は地区内で不幸があり、15 日がお通夜ということで急遽 8 月 14 日に繰り上げて催された。なお、戦前は 14 日だったそうで、むしろ 2005 年は本来の日程で行われたと言った方がいいかもしれない。

会場

図 16, 17 の様に、グラウンド中央ではなく朝礼台の横にやぐらが設置され、その上で鳴り物が演奏された。運動場の中央付近に竹が立てられた。他地区と異なるところは、他地区がやぐらを中心にまわって踊るのに対して、西川ではやぐらに近い側だけで踊られた。なお、かつて西川の盆踊りは踊り手が歌いながら踊り、やぐらは設けられなかったそうである^⑩。中心にやぐらを建てないのはそのときの名残であろう。

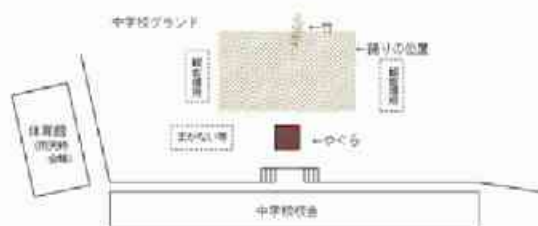


図16 会場見取り図



図17 体育館側から会場写す一右が校舎

なお、参加する人たちは各自ござやシートなどを持ち寄り、図16の「観客場所」付近に好きなように陣取っていた。「まかない等」ではビールや清涼飲料などが振る舞われていた。その横で十津川警察が参加無料の金魚すくいを催していた。

表3 西川地区盆踊り演目

1. 伊勢音頭 (餅つき踊り)	14. いりは踊り (大踊り)
2. 木曾節	15. 笠踊り
3. ホイホイ	16. トントドッコイショ
4. 五条や橋本	17. ナントナント(ラッ節)
5. 今の川堀	18. かけ入り*
6. せんよう椿	19. だいもち*
7. 有田節	20. ヤット ヤ
8. さのさ くずし	21. 串本節
9. よりこ (大踊り)	22. 帽子片手に
10. サノーサノ サイ	23. ヨイショ コラ コラ
11. 筏節 鶴江節・恵山節	24. 月は無情
12. 追分け	25. 関の五本松
13. 餅つき踊り	

当日の様子

武蔵の盆踊りと同様雨が心配されたが、盆踊りが始まることにはすっかりやんでいた。午後7時頃には子どもたちが少しずつ集まり始める。十津川警察による金魚すくいがここでも行われていた。午後8時過ぎには進行役の合図で始められた。観客は地元の人とその関係者で占められた感じであ

った。当日の演目を表3に示す。

他地域では大踊りが残っていても一つであったが、西川地区は「よりこ」と「いは踊り」の二つが伝承されている。保存会の資料には「しのび踊り」「かまくら踊り」など他の大踊りも載せられているが、残念ながら近年踊られることはなく、2005年も踊られなかった。「かけ入り」「だいもち」は続いて演じられる。「よりこ」と同じ踊りで大踊りの一つといえ、盆踊りで最も盛り上がる時、一回だけ演じられるそうである。大踊りとめでたい時に演じられる餅つき踊り以外を「バカ踊り」と称し、各地で歌われている民謡をとり入れて歌われたようである。

踊りは赤または水色で統一された扇子を両手に1本ずつ持って踊るものがほとんどであった。笠踊りでは笠の代わりとして扇子1本を両手で開いて持って踊った。扇子は親指と人差し指、中指の3本で軽く持たれていた。それは裏返したり、裏返して2枚を叩いて音をだす、図18のような扇子二枚で形作るなど多彩な表現技法を駆使するためと思われる。

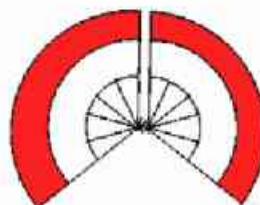


図18 扇子を組み合わせた形の例



図19 両手で扇子を使う

やぐらの上で歌い手は三味線の弾き歌いをしていった。横で進行役が滞らないよう進行を行った。太鼓は片手で抱えて足だけは踊りと一緒に動かしていた(図19)。



図 19 太鼓の奏者



図 20 餅つき踊り



図 21 西川の大踊り

バカ踊りは必ずしも決まった歌詞で歌われているとは限らないので、歌の最終節に「踊りかね みかね ここできりあげて…」という歌詞で歌え替えることにより、一斉に終えることができた。

華麗だが複雑な動きをする西川の盆踊りは、その場において見よう見まねで出来るものではない。しかしながら、参加者の多くは非常に洗練され、揃った動きを披露してくれた。この地区の小、中学校では夏休みに入ってから学校に集まって練習をすると言うことであった。また、若い女性の教師1名が子どもたちの世話をやいていた。この方

は十津川村内の近隣地区の出身ということで毎年盆踊りに参加されているということであった。

5. その他の地区の盆踊り

その他の地区でも盆踊りは行われていた。日程が重なったために盆踊り当日の取材はできなかったが、十津川温泉のある平谷地区でも盆踊りが催された。武蔵、西川地区と同じく2005年8月14日夕刻から午後11頃にかけて十津川温泉街の川岸にある十津川市立平谷小学校で行われた。会場は小原地区の盆踊りと同じくグランド中央にやぐらを設けて行うものであった。パンフレット⁽⁴⁾によると、小原、武蔵の盆踊りのように会場をイスで囲むことしていないが、扇子2枚を両手でもって踊るのは、大踊りのある小原、武蔵、西川と同様であった。平谷の踊りで主となっているのは「餅つき踊り」踊りで、会の名称も平谷餅つき踊り保存会という。

その他にも役場と十津川温泉の間にある折立地区でも行れるようだったが、取材は出来なかった。過疎化による統廃合や村民の関心が薄れたなどで盆踊りは少なくなったが、それでも十津川村内で20足らずの地区で盆踊りが旧盆の時期に催されている。



図 24 十津川の大踊り、パンフレットと歌詞

6. 盆踊りの教育的意義

地元では保存のためあらゆる努力をしており、パンフレットの作成(図24)やCDやDVD等を通じて全国的にもPRしている。武蔵の大踊りは姉妹都市の北海道十津川町にも伝授されたそうである。実際に参加者を見ても、年寄りだけが目立つ盆踊りと異なり、若い人たちもたくさん参加し一見盛況ないように思える。また、西川地区の大踊りの稽古は学校でもやるそうである。このことから地区の行事と学校が乖離している様子はなく、

学校もそれなりの協力をしているように思える。しかしながら、大踊りが地元の初等中等教育課程と密接に関わっているところまでの感触はなかった。平成10年版中学校指導要領には「我が国及び世界の古典から現代までの作品、郷土の民謡など我が国及び世界の民謡のうち、平易で親しみをもてるものであること。」とあり、優雅で高度な踊りを伴う十津川の盆踊りは音楽教育の観点から見ても一級の教材だといえるが、十津川の盆踊りを使って音楽の授業をするとすると、普通の音楽教師にとって困難を感じるであろう。

しかしながら、十津川の大踊りは大学の研究者からは注目を集めている行事である。既に36年には奈良県教育委員会により十津川について学術報告⁹⁾がされているし、大阪教育大の谷村晃氏らにより詳細な盆踊りの報告¹⁰⁾もある。2005年の武蔵の盆踊りには大学の研究者が少なくとも3~4名は調査に訪れていたし、大阪市立大学の学生が30名ほど教員に引率され参加していた。十津川村教育委員会、大野靖史氏によると毎年何件か学生団体が調査、研修のため参加しているという。また、我々自身も教員と学生によるパーティであるが、学生に参加させることで調査が捗る以外のメリットとして学生自身に多くの得るものがあったと考えている。一般的に大学生の多くはこういった地域の伝統文化に接していないか接していてもあまり意識しないことが多いように思われる。踊りの難易度の高く優雅で美しい十津川の大踊りは大学生の教材として非常に優れていると思われる。

7 盆踊りの音楽面

実は筆者の一人森下は大学院生時代だった1988年武蔵の大踊りの取材に立ち会ったことがある。その当時の盆踊りもやはり今日見るのと同じく美しく優雅な踊りであった。しかし、歌に関しては今日とは異なっていると感じられた。1988年当時は、まだ大踊りの歌を中心に12音律の枠を逸脱した音程で歌われていた。これらの音程は単なる調子はずれでは決して無く、当時の大踊りの歌い手が別の日にカラオケを歌っているところを聴かせていただいたところ、歌唱力は抜群であったが音程感はいたって普通であった。すなわち当時の歌い手は大踊りとカラオケの音程をきちんと歌い分けていたと考えられる。つまり、大踊りにはカラオケや西洋音楽で使用される12音律と

は異なる旋法で歌っていたと考えられる。しかし、残念ながら西洋音楽やポップスをはじめ音楽教育で使用される音楽、民謡邦楽を含む商業音楽までもほとんど全て12音律に支配されているといっても過言ではなく、その影響が十津川の大踊りにまで影響するようになったとしか思えない。

それは、十津川盆踊りの歌唱スタイルの変化と関係があるように思われる。例えば西川では踊り手が歌っていたのが歌い手をおくようになった。また、西川はもとより他地区でも女性の歌い手が目立つようになった。近年は民謡を趣味とする女性も多く、商業民謡の歌い方を規範とするために、その音程感が影響したとも考えられる。そのため木曾節や串本節のような有名な民謡はどの地区も商業民謡のように「正確な」音程で歌われていたように思われた。

しかしながら、幸いなことに大踊りの歌の音程は木曾節や串本節に比べ明確ではなかった。まだ、本来の音程が影響していると考えられる。この点については引き続き調査を行う予定である。

謝辞

十津川の調査に当たっては、十津川村教育委員会、大野靖史氏に大変お世話になりました。また、地元の保存会の皆様にも大変お世話になりました。お礼申し上げます。

この研究は、科学研究補助金（平成17年度、課題番号17530647）によります。

文献

- (1) <http://www.vill.totsukawa.lg.jp/>
- (2) <http://www.town.shintotsukawa.lg.jp/>
なお(1)、(2)に関する項目は、Web上の内容を参考にしながら、森下が地元の方々に直接聞いた内容を中心に記したものである。
- (3) 十津川の大踊り(パンフレット)十津川村教育委員会
- (4) 小原の盆踊り(パンフレット)十津川村小原踊り保存会
- (5) 武蔵の盆踊り(パンフレット)十津川村武蔵踊り保存会
- (6) 谷村晃編 十津川の盆踊り アカデミア・ミュージック 1992 東京
- (7) 西川盆踊り歌(歌詞集)西川大踊り保存会 2003
- (8) 平谷の盆踊り(パンフレット)平谷餅搗き踊り保存会
- (9) 奈良教育委員会事務局文化財保護課 十津川十津川村役場 1961 奈良